

三重大大学赴任 30 年記念会にあたって 2011.10.2

江戸橋駅から 30 年歩いてニューヨーク往復 - その出発点 -

三重大大学教育学部に赴任したのは 1982 年 10 月 1 日。つまり今年の 10 月からは 30 年目になる。赴任時に 29 歳で、現在 58 歳であるから、これまでの人生の半分以上を三重大大学で過ごしたことになる。この間、江戸橋駅と大学の往復でニューヨーク往復に近い距離を歩いた計算になる。

月並みな表現しかできないことがもどかしいが、この 29 年は長くもあり、あっという間でもあった。

三重大への赴任は偶然である。京大で学位を取得し、結婚もした直後の頃。別の研究室に遊びに行った際、学会誌に掲載された教員募集記事を同級生が引き出しから出して見せてくれ、応募してみたなら、と言ってくれたのである。それが三重大であった。公募が一般的ではない時代でもあって正直の所ピンとこなかったが、その場に居合わせた彼の指導教官も同じように勧めてくださった。なぜ勧めてくれたのかいまだに不明だが、私の故郷に近い、ということだったかも知れない。いずれにせよ偶然である。

その偶然がきっかけで応募し、しばらくして面接の知らせがあって面接を受け、ほどなく内定の通知があった。私自身のことが私の知らないところでどんどんと決まってしまうような気がした。

面接日に初めて津駅に降り立ち、これでも県庁所在地の駅なのかと思ったこと、面接は会心の出来ではなかったこと、面接後に野本健雄先生が正門近くのバス停まで送ってくださったことが記憶に残っている。(江戸橋から大学までの風景もキャンパスもずいぶん変わったが、このバス停の姿は今も変わっていない。) 採用が決まったことを、指導教官の廣海啓太郎先生がずいぶん喜んでくださった。

10 月 1 日の赴任当日、京都から三重大へ出向いて学部長から辞令をいただき、日本国憲法に従うという国家公務員としての誓約書と、定年は 63 歳という書類に事務室で署名をした。すぐには大学に出る必要はないとのことだった。キャンパス内のデモを見慣れた目には、三重大はひっそりとしていた。

事務手続きの後、久居の公務員宿舎まで公用車で案内してもらった。津駅前を過ぎ、(今から思えば) 三重会館前付近まで来ると少しビルが目立ち始め、いよいよ賑やかな繁華街が始まる、と思ったのもつかの間、ビルはすぐに途切れ、徐々に閑散とし始めた。到着した久居の公務員宿舎は、むき出しのコンクリートブロックの壁にトタン屋根の二軒長屋という、人の住まいとも思えないバラックのような建物であった。これが、以後数年住むことになり、三人の息子のうち二人が生まれ育つ「家」となった。ハレー彗星を望遠鏡で眺めたのも、ここの庭からである。これまで「自宅」には少なからぬ学生に来ていただいたが、このバラックを知る方は限られている。今は取り壊されて跡形もないこのバラックの懐かしさは、しかし、格別である。(ちなみに、斜め向かいの宿舎に時を同じくして入居されたのは高山進先生である。教育学部への赴任も同時、生物資源学部への移籍も

同時であり、今も同僚である。)

さて、赴任はしたものの、当初はわからないことばかりであった。新しい環境に伴う当然の「わからなさ」の他に、自分の置かれている立場の「わからなさ」もあった、と今になっては思われる。

学位取得後の理系のアカデミックキャリアとしては、出身研究室か似た研究分野の研究室の助手になり、つまり立場は変わっても環境自体はさほど変わらず、研究を続けながら徐々に「教員」としての経験を積んでいく、というのが典型的である。しかし私の場合は、一般教育教員ポスト増に伴って授業要員として新規採用され、いきなり講義や実験の担当をするという大きな変化が伴った。

(授業要員であるから、採用時の私の身分は「講師」であった。私は理系でありながら、研究に没頭する助手時代を経験していない。) 1982年後期の私の担当は、文系向けの一般化学1コマと、実験を週3回であった。初めての講義の準備は、(楽しくはあっても)かなり大変だったが、他方、実験も無機化学と有機化学が主であり、まずは復習から始めねばならなかった。試薬の濃度や量などの感覚が大学院時代の実験とは違いすぎて面食らった。しばらくは研究どころではなかった。

研究どころではなかった理由は他にもある。私の着任ポストは増設ポストであって前任者がいない。そのため、通常は前任者から受け継ぐべき部屋や設備がなく、私の研究室は他の教員とは離れた建物にぽつんと置かれた、旧事務室を薄いパーティションで区切った部屋(残りは学生用ロッカールーム)であり、そこには事務机と椅子、ロッカー、試薬棚、書棚、そして調理台のような実験台のみがあった。実験器具を洗う流しもなく、私はピペットから揃え始めた。(もともと、赴任時に居室さえなかった方もあると後から伺った。その後、私の研究室の設備は当時に比べれば格段に充実したが、研究環境として今の方が本当によいのか、それに見合う成果が出ているか、心許ない。)

10月の教授会冒頭で着任の挨拶をした。その教授会では、教育の理想についてではなく、人事について熱心に議論されていた。「長計」とか「短計」とか、ポストを返すとか返さないとか、熱心ではあっても意味不明の議論が続いていた。私の着任したポストも悶着を経ていたようであり、ポストを返すとは私が辞めるということなのか、などと思っていた。喧噪の中の置いてきぼりのような居心地の悪さを感じつつ、近くに座っていた教員が配布資料を議事の済んだ順に破り捨てているのを眺めていた。

バラックのような公務員宿舎、楽しくも大変な講義の準備、ガランとした研究室、居場所を間違えたような教授会 — 私の三重大の出发点である。

....などと、30年どころか、赴任直後の半月までのことで字数が尽きた。本人以外に面白くないのは当然で恐縮だが、マックスウェーバーならずとも本人にとっては忘れられない記憶である。

赴任時、将来は他大学へ転出する可能性は想像できても、学内の他学部へ移籍し、好きでも性に合ってもいない学部長や理事を経験することになるとは想像しなかった。人生は予測し難い。その経緯などは、退職か、喜寿か、機会があればまたいずれ。それまでは元気でいたい。皆様も私も。